

子育て支援におけるエンパワメント過程

平成 16 年度入学
文学部人文学科人間科学コース
社会学・地域福祉社会学

平成 20 年 1 月提出

要約

現代において子育ては難しいとよく言われる。都市化などの環境の変化によって子供の遊び場が減り、それに伴い同じ境遇の友人(つまり自分と同じように乳幼児を持つ母親)と出会う機会も減っている。また近所付き合いの希薄化も感じるどころだ。父親の育児に対する消極的態度も課題の一つと言えよう。こうして次第に社会的に孤立するなどしてストレスや不安が積もり積もって、やがて母親を育児放棄へと向かわせ、子供が死亡してしまうという最悪の事態も最近では少なくない。子育て支援というと有職者である母親の社会復帰しやすい環境づくりなどに目が向けられがちであったが、いわゆる普通の母親の子育て環境に関する問題も深刻化してきたということなのである。本論文において私は母親を追い詰めるのは、子育てそのものというよりも社会的孤立であると考え、福岡を拠点として子育て支援活動を行っているボランティア・グループ「地域ぐるみの子育てをすすめるひだまりの会」へのインタビュー調査などを通じて、その問題を解決するための幾つかの方法を模索してみた。

まず序章では、育児ノイローゼになった母親が我が子を手にかけてしまうという痛ましい事件や、これまでの子育て支援、上昇し続ける児童相談所の相談件数の推移を挙げながら、育児不安を抱える母親の苦しみ、もはや看過できない子育ての問題の現状を記した上で、わが子への虐待などの最悪の事態を未然に防ぐための対策の必要性を訴えている。またこうした問題の背景として、生活様式の変化に伴う育児環境の変化、そして近代家族の特徴とも言える核家族は普遍的なものであるという考え方の流入を取り上げている。そして最後に多様化する家庭養育上の問題を厚生労働省の調査結果で再確認した。

次に第一章では、官と民の二つの子育て支援を紹介し、現在何をしているのか、できているのかを考えている。官(政府)の取り組みとして、つどいの広場事業、地域子育て支援センター、生後4か月までの全戸訪問事業(こんにちは赤ちゃん事業)を、民間の取り組みとして、子育てサロン、ベビーシッター、育児情報誌を挙げた。ただ実際に足を運び、支援の現状をこの目で見る事ができたのが、民間の子育てサロンだけとなってしまったので、その内容が本当に大まかな概要と最後のまとめ程度となってしまった点は悔やまれる。内容も主に母親の社会的孤立の解決に向けて行なわれているものに限定され、例えば金銭面での支援など、また違ったタイプの支援が母親の社会的孤立の状況を打開できないか等の可能性を言及するまでには至らなかった。私は最後に1998年版『厚生白書』や、母

親の就労と子供の発達との関係に関する調査報告(Gottfried,A.E., Gottfried,A.W. 1998)などによって、子供の成長にとって重要な幼少期には、母親が就労等の社会活動よりも育児に専念しなければ将来子供の発達に悪影響を及ぼすとする三歳児神話合理的な根拠がないと断定されており、むしろ参加することで母親の育児によるストレスが軽減され、社会的に孤立する母親も減るのではないかという考えを述べた上で、家にこもりがちになってしまう母親を外へ連れ出すのに効果的な支援形態として民間の子育てサロンに焦点を当てている。

それから第二章では、「保育に欠ける」家族を対象としていた従来の子育て支援よりも、「保育に欠けない」とされる家族への支援拡大が強く求められるようになって、子育てサロンが新しい取り組みとして広がるようになったという経緯を簡単に述べた上で、福岡市を拠点として主にサロンの開設・運営を行なっている地域ぐるみで子育てをすすめるひだまりの会の活動について、インタビュー調査で見聞きした具体的な支援状況なども含めて説明している。ひだまりの会の設立者であるAさんからは、主に運営など設立者から見た子育てサロンについて、そして元会長であるCさんと現会長であるDさんは、もともと利用者としてひだまりの会と関わり、現在の活動に至ったので、利用者から見た子育てサロンについて、そして子育ての現状について伺った。そこから見えてきたのがエンパワメントという支援である。

第三章ではエンパワメントという言葉の定義を、先行研究を参考にしつつ挙げて、第二章で紹介したひだまりの会でのエンパワメント活動について考えてみることにした。ただし、エンパワメントの過程は簡単に言えば、問題を抱えている個人から同じ問題を持つ集団へ、その集団からニーズの実現へ向けた社会変革活動へという流れになるが、ひだまりの会の活動の最終目標として社会変革があるわけではないとのことだったので、ここでは社会変革活動については触れていない。最終的に個人と集団でそれぞれ二つずつの過程を類型化し、まとめでは一つのエンパワメント支援は膨らみ続ける同心円の様に波及効果を持っているとしている。

そして最後に終章において、論文作成の反省と、将来の子育てが明るいものになるようにとの願いと、論文制作に関わったすべての方への謝辞で本論分を締めくくっている。特に思うように作業を進めることができなかつた私に、最後までご指導くださった安立先生には深く感謝をしております。本当にありがとうございました。

目次

序章

第一節 母親の社会的孤立

- (1) 社会的孤立とは 1
- (2) 社会的に孤立する乳幼児の母親たち 2
- (3) これまでの子育て支援 3

第二節 問題の背景

- (1) 育児環境の変化 5
- (2) 近代家族の名残 7
- (3) 問題の解決へ向けて 9

第一章 母親を社会的孤立から救う取り組み

第一節 政府の取り組み

- (1) つどいの広場事業 12
- (2) 地域子育て支援センター 13
- (3) 生後4か月までの全戸訪問事業(こんにちは赤ちゃん事業) 14
- (4) まとめ 15

第二節 民間の取り組み

- (1) 子育てサロン 16
- (2) その他の支援 16
- (3) まとめ 17

第二章 地域の子育て支援の現場

- 地域ぐるみの子育てをすすめるひだまりの会の事例

第一節 設立者の視点から

- (1) 地域ぐるみの子育てをすすめるひだまりの会の沿革 19
- (2) 地域ぐるみの子育てをすすめるひだまりの会の現在 21
- (3) まとめ 23

第二節 利用者・スタッフの視点から

- (1) 地域ぐるみで子育てをすすめるひだまりの会との出会い 25
- (2) スタッフとして感じた苦労 28
- (3) まとめ 30

第三章 エンパワメントは母親を社会的孤立から救えるか

第一節 エンパワメントとは

- (1) エンパワメントの定義 32
- (2) エンパワメントとひだまりの会の活動段階 33

第二節 子育て支援のエンパワメント過程	
（１）エンパワメントの前に	34
（２）子育て支援のエンパワメント過程の種類	36
（３）まとめ	37
終章	38
参考文献・参考 URL	40